



黒船に負けるな

NTTコミュニケーションズ株式会社東海支店
理事 東海支店長 工藤 晶子

1853年の黒船来航。浦賀は見物人でいっぱいとなり、混乱しながらも何も知らない人々は空砲の音を花火の感覚で喜んだと言われています。アメリカのITジャイアントと言われる、グーグル、アップル、アマゾン、フェイスブックが、世界のほとんどの地域で発揮している大きなプレゼンスは目を見張るものがありますが、特に日本マーケットにおける影響力とその製品やサービスの驚異的な浸透度から、ICTにかかわる日本の企業やメディアは、彼らを「黒船襲来」に例えます。日本のICT関連企業は、この「黒船襲来」にどのように対抗していくべきなのでしょう。そしてその経営者はどのようなリーダーシップを発揮して、自社を変革していくべきなのでしょう。江戸時代後期、黒船の空砲に花火感覚で喜んだ人々も、次第に不安が募り、「泰平の眠りを覚ます上喜撰たつた四杯で夜も眠れず」という狂歌が詠まれました。

NHK大河ドラマ「西郷どん」では、攘夷論派としての薩摩藩を中心に描いていますが、その異国排斥を唱える尊攘運動の主力であった人々が倒幕へ向かったことに、現在のICT業界の現状と照らしてとても興味を覚えます。グーグルなど海外からのサービスの排斥は、今の時代ではありえないことですが、ITジャイアントを超えていく製品・サービスを数多く生み出しそして活用して、日本市場でのイノベーションを触発し、それまでとは異なる方法で新たな経済活動を持続的に成長させていく仕組み、ビジネスのデジタルトランスフォーメーションを牽引していくことが必要だと心底思っています。

幕末から明治維新を経て、文明開化の世を迎えるまでの一時期は、日本の歴史でも屈指の激動期でした。幕藩体制が崩壊し、近代国家への道を一気に駆け上ろうとしたのですから、日本中で悲劇が生まれるのも当然です。この苦難と試練をいかに乗り切るか、ここに指導者の条件といった極めて今日的な課題を感じます。泰平無事な時には、組織は破綻なく自転しますが、それでも既存のビジネス習慣への固執がマーケットへの適応を遅らせ、ひいては破壊を招くことも稀ではありません。ましてや新たな潮流がどつと押し寄せる中、権謀術数などによって組織が分裂すれば、難局を乗り切ることは不可能です。組織が人間の集団である以上、それを生かすも殺すも指導者の器次第かと思うと、自分自身を振り返りその未熟さに愕然とします。

この変革すべき時代・激動の時代に、微力ながら今こそ何かしなければという強い思いが私の中にあり、そういった意味でも中部経済連合会イノベーション委員会を始めとした各委員会での具体策を議論しそれを実行していく場としての効能は、大変大きいと感じます。日本経済を牽引する中核地域として、また世界のビジネスを牽引してく地域として、中部の結束を固め、イノベーションを触発する具体的な仕組み作りに貢献させていただきたいと切に思います。